

建築家・長谷川逸子

女流の冠はいらない

朝倉幸子◎TH-1

illustration:Taco◎Switch・エンタテインメント

■ギャラリーになります

居ながらにして満開の桜が愉しめる。そんな大きな窓のあるオフィスに、長谷川逸子・建築計画工房が移転した。長年事務所だった自社ビルは、最上階を建築作品の模型展示ルーム、3フロアは皆さんに使ってもらえる小会議室やパーティもできるギャラリーにする計画で、只今改修中。これまでも来日した建築家や、これからの建築界を担う若い建築家がレクチャーをするときに頼まれて、貸していた。引き続き、長谷川先生のボランティアスペースになるのです。

40年近く前に弟さんの住まいとして建てたが、今でもパンチングメタルが効いた手摺が、ダイナミックな空間に生き生きとしている。ある時期、1階を日本料理屋さんに貸したら、毎晩建築家が入り浸って板さんにウルサイ!と叱られたことや、「縁起がよい建物なので」と、居座った会社のこと。建物エピソードを、愉快にお話される先生は名エンターテイナーです。

■ヨットも絵も、だけど建築

焼津生まれで、弱かった身体を丈夫にするために、ご両親にテニスやヨットをさせられた。母上のご実家がお寺で、お茶の煎れ方も躰られたそう。そういえば、今も良家の子女の気配があります。菊竹事務所に入所間もなく、突然訪問された丹下健三先生にお茶を呈して、お褒めにあずかった。ご縁なのか、後にハーバード大学の客員教授に推薦してくれたのが丹下先生だった。菊竹清訓先生との出会いは大学2年のとき。長谷川先生がバルサで造った模型をご覧になった菊竹先生が、ご自身で大学に電話を掛けてきて、「模型をつくりに来るように」と。当時、ヨットの神奈川県代表の国体選手であった長谷川先生が夢中なのは建築ではなかった。図書館で「菊竹清訓」を調べたとか。油絵は入所後も個展の準備をするくらい腕前。事務所での席は師匠の前で、描かれ

るスケッチを図面に起こすハードな毎日、とうとうダウン。慌てて上京された母上に、「絵か建築か」と迫られ「建築が面白い」と答えたら、病院から戻って愕然。道具は小筆に至るまですべて持ち去られていたのです。建築家長谷川逸子誕生の秘話なり。

■驚きの水平と垂直感受力

湘南台文化センターの現場を歩いて、基礎がらみの擁壁の垂直がとれていないと感じて調べたら、傾いている。構造設計の木村俊彦先生が来て、ゼネコンの前にテーブルをひっくり返した。「長谷川が気付くまでわからなかったのか」と、凄い剣幕だった。霸志堂も「木村先生は怒ると茹で蛸のように真っ赤になると噂を聞いた」という。ヨットで鍛えた眼力は、今に至るまでスーパーな能力をお持ちなのです。

篠原一男研究室在籍中、確認申請業務の打合せは木村俊彦先生と直接されたそう。日本建築学会の熊本大会でお会いして話の止まらない松井源吾先生と朝まで続いた構造談義。構造コースで松井先生に学んで建築のデザインには、「構造が大事である」と考えていたので絶好の機会でした。お酒がお強いからこそできたのです。

建築家や構造家がほとんど男性という中、常にトップをキープしてきた長谷川逸子先生。女性だからと悔しい思いはなかったかとお聞きしたら、「一杯ありましたよ」と。パートナーもいない、歌舞伎の国の女性が一人でやっている。そんな理由で、海外のコンペで、一等を取りながら実現しなかったことも多々ある。

長谷川逸子建築に触れたくて、新潟市民芸術文化会館「りゅーとぴあ」でのコンサートに行ったときの満たされた時間を、豪雪とともに思い出している。

